

BACH 映画鑑賞会

映画 サウンド・オブ・ミュージック (174分)

監督 ロバート・ワイズ

音楽 リチャード・ロジャース、オスカー・ハマースタイン二世

出演者 ジュリー・アンドリュース、クリストファー・プラマー他

1938年、オーストリア・ザルツブルグ。古風で厳格な教育方針のトラップ家に家庭教師としてやってきた修道女マリアは、子どもたちに音楽や歌うことの素晴らしさを伝えていこうとするが、子どもたちの父親であるトラップ大佐とは事あるごとに衝突してしまう。やがて、自分がトラップ大佐にひかれていることに気付いたマリアだったが、そんな折、トラップ大佐は再婚が決まってしまう・・・。「ドレミの歌」「私のお気に入り」「エーデルワイス」など劇中で歌われる名曲の数々とともに、映画史に名を刻む傑作ミュージカル。アカデミー賞では作品賞、監督賞ほか5部門受賞。日本では1965年に公開された。

白雪姫と7人の小人という雰囲気もあり、家族全員で楽しむことのできるミュージカルの代表作です。



劇中曲の解説

1 前奏曲 サウンド・オブ・ミュージック アルプスの山々が映された後、ぐっとマリアのアップになって、野原の中でいきなり歌い始めるのがこのテーマ曲「サウンド・オブ・ミュージック」です。大変印象的な出だしです。

曲の方も穏やかな前奏に続いて、いきなり高音で始まり、聞いている人の耳を強く引き付けます。ジュリー・アンドリュース演ずるマリアの持つ爽やかさを強く印象づける曲です。中間部では穏やかに自然を讃え、マリアは夢見心地になります。再度、最初の部分に戻り静かに終わります。我に返ったマリアは慌てて修道院の方に戻ります。

2 序曲 オーケストラ テーマ曲に続いて出てくるのが序曲です。この映画は名曲揃いですが、その名旋律がこれでもかこれでもかとメドレーで出てくる大変ゴージャスな序曲です。

3 朝の賛美歌ハレルヤ ア・カペラでグレゴリオ聖歌の中の詩篇 109 番「主は仰せられり」が歌われた後、「朝の賛美歌」になります。この賛美歌もロジャースのオリジナル曲です。「アンジェラスの鐘」の音が鳴った後、晴れやかな「ハレルヤ」になります。この女声4部合唱の「ハレルヤ」もロジャースのオリジナルです。最後はゆっくりとしたテンポになり、静かに終わります。

4 マリア 修道院長、シスター・ソフィア、シスター・マルガレッタ、シスター・ベルテ「マリアの”人となり”をユーモラスに歌った曲です。「マリアは修道院には不向きだ」と尼僧たちが修道院長は歌いますが、基本的には暖かな気分が溢れています。

曲は速い3拍子で始まり、3人の尼僧と修道院長が順々に畳み掛けるようにマリアの悪い行いを

列挙していきます。途中「マリアは笑わせてくれる」と笑い声が入った後、テンポが変わり、軽快にスイングする感じになります。掛け合いをするように進んだ後、最後は斉唱になり「困ったもんだ」という感じで結ばれます。

この尼僧の中の1人のシスター・ソフィアは映画ではマーニー・ニクソンという人が歌っています。実は、彼女は、映画「マイ・フェアレディ」、映画「ウェストサイド物語」でそれぞれの主役の替わりに吹き替えで歌を歌っている。彼女自身がスクリーンに登場している数少ない場面です。

5 自信を持って 修道院長からトラップ家に家庭教師に行き社会勉強をしてくるように命じられたマリアが不安な気分の中で「自信を持って」と歌う曲です。

自己暗示にかけるような力強さと不安な気分とが混ざったような曲です。前奏の部分から激しく転調し、オペラのレチタティーヴォを思わすように語り歌われて行きます。めくるめくような気分の変化と多彩な表情を持っています。ジュリー・アンドリュースの演劇的な歌声にぴったりの曲です。オリジナルのミュージカルにはなく、映画のために付け加えられた曲です。

6 もうすぐ17才 トラップ家の長女リーズルとその一つ上の恋人ロルフとが交互に歌う初々しさに溢れる曲です。若い二人が交互に歌う、とても美しい曲です。

ロルフは映画の後半ではトラップ家と敵対する立場になりますが、ここでは”彼女の力になろう”と”お兄さんぶり”を見せます。二人は踊り始めますが、雨が降り始め、中断させられます。

7 私のお気に入り 雷を怖がる子供たちが次々にマリアの部屋に入って来た後、「自分のお気に入り」を思い浮かべると元気が出る」と歌ってきかせます。歌っているうちに自分自身への応援歌のようにもなってきます。

速い三拍子のリズムの上に上下に動く単純なモチーフが延々と続く曲です。シンプルだけれども耳を引き付ける魅力を持っています。短調で始まりますが、いつのまにか長調になっています。この単純なモチーフは、展開しやすいせいか、ジャズ風にアレンジされることもあります。ジャズ風に演奏しても格好良く決まる曲です。

8 すべての山に登れ トラップ大佐への思いを整理するために修道院に戻ってきたマリアに対して、修道院長が「自分の人生を見つけなさい」と力強く励ます曲です。

最初低音で始まり、曲の盛り上がりに合わせて音域が上がって行き、最後はドラマティックな高音で結ばれます。文字通り「山に登れ」という感じの音の動きの曲です。映画ではペギー・ウッドという人が歌っていますが、一世代の名唱という迫力のあるものです。

この曲は映画の最後の場面で合唱でもう一度出てきます。

9 ひとりぼっちの山羊飼 マリアと子供たちがお客さんの前で人形劇を見せる場で歌われます。ポルカ風のリズムに乗って、ヨーデル風の歌が続きます。マリアの伸びやかな歌と子供たちの「レイオル、レイオル。」という掛け声の掛け合いが大変楽しく、ユーモラスな曲です。

10 サウンド・オブ・ミュージック 映画の最初に出てきた「サウンド・オブ・ミュージック」が今度は子供たちの合唱で歌われます。大佐がマリアに向かって「立ち去れ」と言った後に、子供たちの声がひっそりと聞こえて来る場で歌われます。その美しさに感動した大佐

は、曲の後半ではその合唱に加わってしまいます。ドラマの転機となる、感動的な場面です。

11 ドレミの歌 マリアが子供たちをピクニックに連れて行き、「音楽の基礎」を教える場面で歌われます。日本ではペギー葉山訳（というよりは作詞）による「ドーはドーナツのド」という歌詞で誰もが知っている曲となっています

曲はギターチューニングを表すような音型に続いて、マリアのシンプルな歌で始まります。単純な音階練習のような音の動きなのに、楽しさが溢れています。子供たちは「ド!」「レ!」という合いの手で曲に加わった後、声を合わせて歌い始めます。

その後、「ソードラーファーミードーレー」ともう少しメロディアスな歌の練習の部分になります。” Good!” というマリア先生の言葉の後、今度は意味のある言葉を乗せて歌われます。活気のある展開を見せ、ますます楽しい雰囲気になった後、「ドミミ、ミソソ、レファファ、ラシシ」の繰り返しと「ソードラーファー...」が組み合わせられ、さらに生き生きとした表情を見せます。最後は行進曲調になり、華やかなクライマックスを作って「ソ、ド」と終わります。

12 何かよいこと パーティの場で、マリアと大佐が見つめ合って歌う愛の歌です。この映画の中ではもっとも「大人の歌」という雰囲気の漂う曲です。ささやくように歌い始めた後、後半で夢見るように甘く盛り上がりて行きます。オリジナルのミュージカルにはなく、映画のために付け加えられた曲です。

13 行列聖歌、マリアと大佐の結婚式の場で歌われる曲です。先に出てきた「マリア」を合唱付きの行進曲にアレンジしたもので、パイプオルガンの音を含めて、重厚に歌われます（といいつつ、歌詞は「おしゃべり娘で道化者...」と同じ内容となっているのが面白いところです。).

14 エーデルワイス ザルツブルクの合唱コンクールに出ることになったトラップ家が祖国を思って歌う曲です。この曲も誰もが知っている、ほとんど民謡のような曲です。こういう誰でも歌える名曲を次々と書いたところが、リチャード・ロジャースの素晴らしい点です。トラップ大佐が、美しいクルーナー・ボイスで歌いはじめますが、途中、声を詰まらせます。それを助けるように、マリアと子供たちの声加わり、最後は会場全体の大合唱となります。

15 さようなら、ごきげんよう トラップ家で行われたパーティの「おひらき」の出し物として7人の子供たちが可愛らしい振り付きで歌う曲です。英語、フランス語、ドイツ語で「さようなら」という言葉を順に歌っていきます。最後はいちばん小さなグレットルが半分目が閉じてしまったように眠そうに歌って、「グッバーイ」というお客さんの暖かな合唱と共に終わります。この曲は、ザルツブルクのコンクールの場面でも歌われます。これはコンクールの出し物であると共に祖国への別れも意味しています。

16 すべての山に登れ ナチの追っ手から逃れて、アルプスを越えてスイスに向かうラストシーンで流れる合唱曲です。ここでは最初の方の歌詞は歌われず、後半だけが歌われます。「夢を見つけるまですべての山に登れ...」と感動